



川野正登記念公益財団法人

川野小児医学奨学財団

設立30周年記念誌

目次

ごあいさつ	2
理事長 川野幸夫 常務理事 柳澤正義	
第1章 30年のあゆみ	5
第2章 データで振り返る30年	21
第3章 これからの財団	27
財団概要	30
おわりに	32

ごあいさつ



理事長

川野 幸夫

株式会社ヤオコー / 代表取締役会長

今年度、この財団は設立30周年を迎えることができました。

これもひとえに皆さまお一人おひとりのご支援、ご協力のおかげと心より感謝申し上げます。

私は1982年の秋に、当時小学校2年生だった長男の「正登」^{まさのり}を、ウイルス性脳炎という病気で亡くしました。今もって信じられないほど、あつという間の出来事でした。それまでの私は、仕事のことしか頭にありませんでしたから、家族との生活の場は相当おろそかになっていたと思います。正登が亡くなって「あの子はお父さんを求めている」と妻から聞かされ愕然としました。そして、人の親としてあの子に何もしてやれなかったことをつくづく悔やみました。

やがて月日が経つにしがたい、正登の霊をなぐさめるためにも、正登のような不幸な子どもを少なくするための活動をするのが私に与えられた責務だと思うようになり、1989年にこの財団を設立しました。

これまで小児医学・医療の発展を目指し、小児医学研究者に対する研究助成や表彰、小児医学を志す医学生への奨学金給付等を行ってきました。30年間の活動の継続が徐々に実を結び、小児医学界においてもご評価を頂けるようになりました。同時に、子どもを取り巻く環境が大きく変化する今、できることはまだまだあると感じています。そこでこの節目を機に既存事業を拡大し、新規事業を始めることを決めました。私が大切にしている「おかげさま」という理念をこの財団においても忘れることなく、「この財団の存在、そして活動が多くの方々のお役に立つ」そんな財団であり続けられるよう努力をしていきたいと思っています。

最後になりましたが、引き続きの変わらぬご指導、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

第1章

30年のあゆみ

常務理事

柳澤正義

国立成育医療研究センター / 名誉総長



「多くの皆さまに支えられ
この財団が設立30周年を迎えたこと、
関係者の一人として大変嬉しく、誇らしく思います。」

川野幸夫理事長の小児医学・医療の発展向上を願う熱い想いを受けて設立、運営されてきた当財団は、今一層大きく発展しつつあります。多岐にわたる事業の中核をなす研究助成事業の交付者は2018年度までに延べ478名となり、総額は7億5,400万円に達しています。様々な民間団体が行う医学研究助成の中でも、1件あたりの助成額は大変大きく、小児医学研究者を確実に支えていると言えます。また、設立10周年を記念して創設された小児医学川野賞の歴代の受賞者は、受賞後も大学や研究機関等で大いに活躍しておられ、当財団の選考の目の確かさを改めて確認することができます。当財団の事業の特徴として、これまでの実績のみならず、今後の一層の活躍、発展を期待しているところに意義があると感じています。

少子化の進行するわが国で、小児医療の充実、それを支える小児医学研究の振興は非常に重要でありながら、全国の小児科医や小児医学研究者は研究費の獲得に大変苦労しているようです。大人のがんや生活習慣病に関する研究の推進が国を挙げてなされているのに対し、小児医学・医療については必ずしも十分ではありません。当財団のように小児医学に特化した研究支援は貴重であり、医学界のみならず広く一般社会からの期待が益々大きくなっていくものと思います。

今年、公益財団法人としての所管が埼玉県から内閣府に移りました。文字通り全国を見渡して事業展開する民間団体として、これまで以上に大きな役割を果たしていくでしょう。

30年間の主な活動

「子どもたちの健やかな成長を実現したい」
その想いを幹として少しずつ枝葉を増やし、小児医学・医療の
発展のために活動の幅を広げてきました。

\30周年/



2019

2012

2010

2007

2001

1999

1995

1992

1990

1989

行政庁を埼玉県から内閣府に変更
財団設立 30 周年を記念して、
既存事業を拡大・新規事業を開始

研究助成事業に
若手枠 (40 歳以下) を増設

公益財団法人に移行

奨学金給付事業を開始

特定公益増進法人に認定

財団設立 10 周年を記念して、
小児医学川野賞を創設

埼玉県の認可を受け、
財団法人川野小児医学奨学財団を設立

研究助成および
奨学金貸与事業を開始

小児医療施設支援
事業を開始

医学会助成事業を開始

「病気の子どもたちのために 何かできないか」 財団設立を可能にしたもの

平成の幕開けとともに、そのあゆみを始めた川野小児医学奨学財団。
財団設立には理事長川野の想いと、その実現を可能にした出来事や
多くの方々のお力添えがありました。



1989

財団法人川野小児医学奨学財団設立



朝日新聞に掲載された設立発表の記事

設立から遡ること約7年、突然の病気により長男を亡くした川野幸夫は、その死を悼み「病気で苦しむ子どもたちを救う活動ができなにか」と財団の設立を考えていました。

その構想の実現を支えたのは、当時、川野が代表取締役社長を務めるスーパーマーケットチェーン、(株)ヤオコーの株式公開と、埼玉県医師会会長・福島茂夫氏らの協力でした。川野は財団設立資金として、自身の持っていた(株)ヤオコーの株(当時、約13億円相当)と私財3億円を寄附。また、事業を具体的なかたちにするため、福島茂夫医師らに理事としての参画を依頼しました。



埼玉民論に掲載された設立発表の記事

「どうすればより多くの子どもたちを救うことができるのか」、思案の末にたどり着いたのは、患者に対する支援ではなく、患者を救う医学・医療を担う人々を支えるための取り組みでした。病気の子どもたちを救うために医学・医療の発展は欠かせません。難病と呼ばれる病気の治療法が見つかれば、一人の命だけでなく、その病気にかかる多くの子どもたちを救うことにつながります。

そこで小児医学・医療の発展のために事業を行うことを決め、埼玉県の認可を得て実際の事業をスタートさせました。このような財団は全国的にも珍しく、医療関係者をはじめ各方面から期待の声が寄せられるとともに、設立の様子は新聞各社に取り上げられました。

1990

奨学金貸与事業の開始



事業開始当時、広報のために使用していたリーフレット



奨学金貸与の募集要項が書かれた事業開始当時のリーフレット

同年、小児医学界における将来の担い手を輩出することを目的に、小児医学を志す医学生に対する奨学金貸与事業もスタートしました。奨学生として選ばれた医学生には月6万円の奨学金が無利子で貸与されます。事業開始時は、埼玉県内の高校を卒業し、埼玉県内の医科大学で小児医学を志す医学生のみを対象に募集をしていました。

その後、より多くの医学生を対象とできるよう、1996年には、埼玉県内の高校卒業生であれば、日本全国どここの医学部で学んでいても応募ができるように条件を変更しました。現在も多くの卒業生が医師として活躍しています。

小児医学・医療に携わる 個人を支える取り組み

「限られた資金の中で、小児医学・医療の発展のために何をすべきか」を考え、最初にスタートしたのが研究助成事業と奨学金貸与事業の2つの事業です。これには、小児医学・医療を支える個人をサポートすることが、その分野の発展にとってまず重要だという川野の考えがありました。



1990

研究助成事業の開始



助成研究成果発表会の様子

1990年、小児医学・医療分野の研究に日夜励む研究者をサポートするため、研究助成事業を開始。当時は、埼玉県内の医科大学や医療機関、医師会などに所属する小児医学研究者を対象に応募を受け付けていました。初年度は9名の小児医学研究者に対して、総額2,000万円の助成金を交付しています。その後、1996年には埼玉県外の機関に所属する小児医学研究者も応募ができるよう条件を変更しました。

小児医学・医療に関する研究の幅が広がり続けているとともに、年々研究費の獲得が難しくなっていることもあり、事業開始から現在に至るまで、応募者数、交付者数は増え続けています。助成の対象として選ばれた研究の多くは、国内の医学誌をはじめ、厳しい審査のある海外の一流医学誌にも掲載されています。



助成金で購入したテレビの前に集まる、国立がんセンターに入院中の子どもたち

1995

小児医療施設支援事業の開始



国立がんセンターより感謝状を受ける川野理事長

1995年には病気で苦しむ子どもたちが長期療養している医療施設への支援事業を始めました。病棟で過ごす子どもたちのQOL（生活の質）を高めることは大切なことですが、医療施設がそのための予算を十分に確保するのは簡単ではありません。そこで、設備やボランティア活動を充実させるために必要となる資金の助成を決めました。

財団法人癌研究会附属病院小児病棟や国立小児病院血液腫瘍科へのテレビデオ購入費の助成をはじめ、多数の施設を支援してきました。

1996年には国立がんセンターより感謝状を頂きました。2016年からは条件を埼玉県内の医療施設に限定し、地域に密着したクリニックや医療型障害児入所施設に対しての支援に力を入れています。

団体、組織を支える 事業への拡大

財団の存在が少しずつ知られるようになり、活動に関わる方が増え始めると、寄せられる期待や意見も多くなっていました。

そこで、小児医学・医療の発展にさらに寄与できるよう、支援の枝を個人から団体、組織へも広げていきました。



第42回東日本小児科学会の様子

1992

医学会助成事業の開始



1992年には小児医学についての研究発表や意見交換を行う医学会の開催に対する助成を開始しました。初回の助成先として選ばれたのは「日本脳卒中外科研究会」と「第12回日本画像医学会」の2団体。それぞれに100万円の助成金を交付しています。

その後も毎年、小児医学に関する幅広い分野の医学会から申請を受け付けており、申請数は年々増加しています。熱心な小児医学研究者が集うことにより、専門的な知識を深め、技術の進歩をより一層促進取り組みを支えています。



第1回小児医学川野賞贈呈式にて理事長より花束を贈られる奥山真紀子先生



(左上) 第4回、(右上) 第5回、(左下) 第8回、(右下) 第9回 小児医学川野賞贈呈式の様子

小児医学界全体を 支える取り組みへ

これまでの活動が少しずつ評価をされてきた頃、活動資金も徐々に増えてきました。その資金を新たな事業、そして既存事業の充実に充てることを決め、さらなる支援拡大へつなげていきました。



受賞者に贈られるメダル

1999

小児医学川野賞の創設



財団設立10周年という大きな節目を迎えた1999年、小児医学川野賞を創設しました。この賞は、基礎医学、臨床・社会医学分野の研究で優れた業績を上げ、その後の活躍も大いに期待できる研究者を表彰するものです。

既に残された功績を讃える賞が多い中、小児医学川野賞の選考ではこれからの躍進にも重きを置いています。そこには、この賞がこれからの小児医学界をリードする存在の輩出、そして若手研究者の意欲の醸成につながって欲しいという思いがありました。この事業では埼玉県内に留まらず全国から推薦を受け付けることを決め、当時の事務局のメンバーが全国の学会1件1件に直接電話をかけるなどして広報活動を行いました。

記念すべき第1回小児医学川野賞は、当時埼玉県立小児医療センターにご所属の奥山真紀子先生が「小児精神神経学」という研究テーマで受賞されています。

創設から19年、受賞者は39名に上ります。歴代の受賞者の顔ぶれを改めて見ると、今まさに日本の小児医学界を背負って立っている方々ばかりです。受賞者の目覚ましい活躍がこの賞の価値をさらに高め、財団の存在を小児医学界に広めるきっかけにもなったのは明らかです。

2007

研究助成事業に若手枠を増設



研究助成選考委員会の様子



若手枠交付者も参加し、大いに盛り上がった助成研究成果発表会の様子

若手研究者の活躍を後押しするため、2007年には研究助成事業に40歳以下を対象とした若手枠を増設しました。研究費の十分な確保は、どの研究者にとっても大きな課題ですが、若手研究者に振り分けられる研究費は特に少なく、若手研究者が研究を続けるのは容易ではありません。

そこで当財団では、実績が少なくとも、その研究が小児医学・医療にとって重要であり、今後花開く可能性があると思われる研究であれば助成をしています。実際に、若手枠で研究助成金を受けた研究が国家的にも重要なプロジェクトとして認められ、科学研究費を受けているケースもあります。

2010

奨学金給付事業を開始



奨学生証書授与式にて理事長より楯を受け取る奨学生



(左上、右上、左下) 奨学生証書授与式の様子、(右下) 奨学生に贈られる楯

貸与型奨学金の返還困難者が社会問題化したこともあり、これまで貸与型で進めてきた奨学金事業の見直しを決断。2010年に、返還義務のない給付型へと制度変更しに踏み切りました。医学生が経済的な不安を抱えることなく学業や研究に邁進できるようより手厚い支援を始め、2015年からは全ての奨学生が給付型の奨学金を受けています。

また、経済的な支援だけではなく、勉強や研究、卒業後のキャリア設計に役立つよう、小児医学研究者や他大学の医学生と交流を図る機会を積極的に提供しています。

奨学生は研究助成金交付者による成果発表会や奨学生証書授与式に参加でき、出席した多くの奨学生から「大変貴重な時間となった」と感想をもらっています。

奨学金給付者インタビュー

子ども一人ひとりに寄り添える存在になりたい。
公務員から医師を目指して



阿部 幹也 さん

千葉大学医学部医学科

被災地での経験が転機に

大学卒業後、埼玉県庁で環境に関する仕事をしていたが、2011年に起きた東日本大震災の復興支援のため、1年間福島県庁で働くことになりました。現地では、避難指示区域の調査や生活再建に向けた住民懇談会への参加、子どもたちへの学習支援など、色々な活動をしました。その中で、ストレスや放射線物質によって子どもの健康に害が出るのではないかと、不安を抱えている多くの保護者の方々に会いました。また、深い悲しみを感じながらも、明るく振る舞おうとする子どももいて、その姿は今でも忘れられません。こういった経験を通じて、子ども一人ひとりの想いや悩みに寄り添い、心身の健康をサポートできる存在になりたいという夢を抱くようになりました。「医師こそ、その夢を叶えられる職業だ」と思い、26歳の時に医学部へ入り直すことを決めました。

しかし、社会人を辞めてもう一度大学で学び直すということには、多くのハードルがありました。私の場合、両親に一度大学を卒業させてもらっていたので、学費や生活費は自分でどうにかしようと決めていましたから、経済的な不安は大きかったです。そんな時に知ったのが川野小児医学奨学財団の奨学金制度でした。

経済的な支援以上のものを 得られる奨学金制度

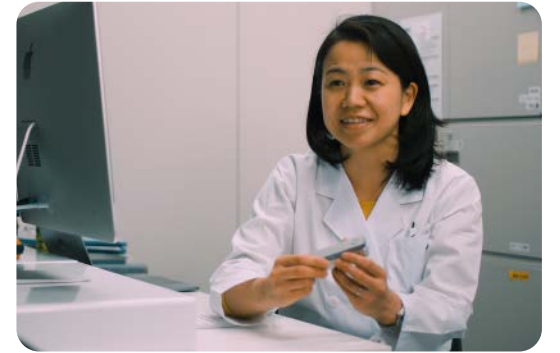
実際に医学部での授業は忙しく、解剖実習や病院実習が始まるとアルバイトをする時間もなかなかとれません。奨学金のおかげで経済的な不安を抱えることなく、充実した大学生活を送ることができています。学業に専念できることは、本当にありがたいことです。

同時に、財団からは人とのつながりを作る機会も頂いていると感じます。奨学生は毎年、財団の開催する助成研究成果発表会や奨学生証書授与式に参加できます。そこでは、小児医学の現場で活躍されている先輩方や他大学の医学生と交流することができ、これは自分ではなかなか作れない貴重な機会です。そして、そこで得られる多くの刺激によって医学に対する意欲はますます強くなっています。

大学卒業後は、社会人での経験や学生時代に得られた人とのつながりを生かして、まずは臨床分野で子どもたち一人ひとりに寄り添える医師を目指していきたいと思っています。そしていつか、興味のある予防医学や公衆衛生の分野で、子どもたちの健康を守る活動ができればと考えています。

研究助成金交付者インタビュー

新型機器を使った遺伝子解析がもたらした、
難病の原因解明への大きな一歩



三橋 里美 先生

横浜市立大学大学院医学研究科遺伝学
交付時：東海大学医学部基礎医学系分子生命科学

新たな手法にチャレンジしたい。 川野小児医学奨学財団との出会い

私は現在、筋ジストロフィーなどの遺伝性疾患の原因を見つける研究をしています。遺伝性疾患は遺伝子の変異によって起こりますが、原因となる遺伝子を特定することが非常に難しく、遺伝子解析の技術が進んだ今でさえ診断をつけられないケースが多くあります。病気の原因が分からないと治療方法も決まらず、患者さんは大変な不安を抱えます。少しでもその不安を取り除き、適切な治療をしたい、そんな思いで研究をしています。

2016年頃、筋肉の難病を引き起こす遺伝子の特定を試みていました。その頃は「ショートリードシーケンサー」という、遺伝子を断片的に読み込んで全体を解析する手法が主流でしたが、この病気の原因を解明するには、一度にもっと長く遺伝子を読む必要がありました。そこで、それを可能にする「ロングリードシーケンサー」を使えないかと考えたのです。アイディアに自信はありましたが、まだ新しい技術でしたので実績はなく、研究費獲得に暗中模索している状態でした。

川野小児医学奨学財団の研究助成事業を見つけたのは、そんな時です。通常、研究の分野を限

定して募集しているケースが多いのですが、川野財団の過去の研究助成のテーマは非常に幅が広く、若手研究者も多かったのも、この研究助成であれば私の研究も評価してもらえるかもしれないと思い応募しました。それでも、まさか1回目の応募で選ばれるとは思っていませんでしたので、助成金交付が決まった時は本当に嬉しかったです。

アイディアがカタチに。 そしてさらなる発展へ

川野財団の助成金のおかげで機器を購入し、実際に解析を進めることができました。さらに、その解析方法を他の遺伝子にも応用することができるようになり、当初ターゲットとしていた遺伝子以外の遺伝子の解析にも役立っています。この研究で、国から予算を頂くこともできました。私はいつも、研究は多様性が大切だと思っています。色々な人がそれぞれのオリジナルなアイディアをカタチにしていけることで、医学は発展していくと信じています。一方で、実績がないと研究費の獲得は非常に難しいというのも事実です。研究者が挑戦し続けられるよう、川野財団にはこれからも多様な研究を支援して欲しいと思っています。

第2章

データで振り返る30年

ロゴマークに込められた思い

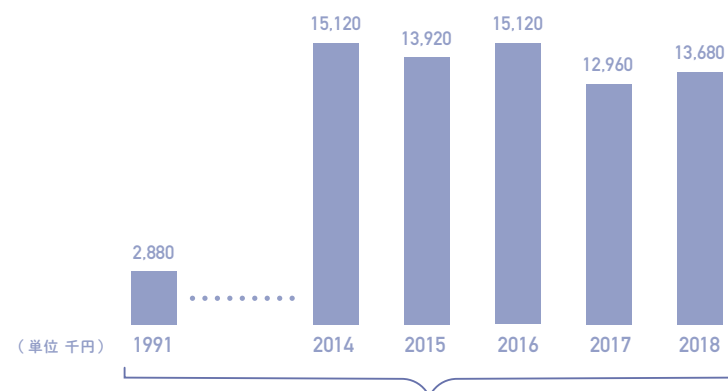


2016年には、当財団の想いや活動をますます多くの方にご理解、ご支援いただけるよう、ロゴマークを策定しました。

このロゴマークは、理事長の長男が亡くなった時に流れたであろう涙の滴の形をベースにしています。同時に、その時から抱き続けている「かけがえのない子どもたちの命を私たち大人が守り、明るく健やかに成長できるよう支えていきたい」という想いをハートと点で表しています。



奨学金貸与・給付



貸与・給付総額

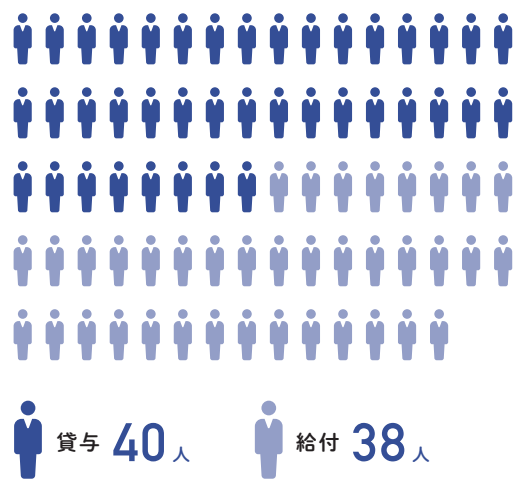
2億1204万円

1990年に始まった奨学金事業。2018年には貸与・給付総額が2億1千万円を超えました

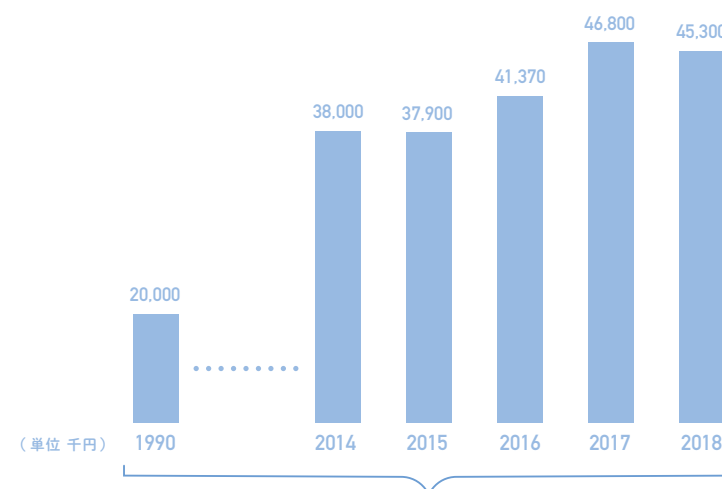
貸与・給付延べ人数

296人

2018年までに、
40人に貸与・38人に給付を行っています



研究助成



交付総額

7億5399万円

1990年から始まった研究助成の交付総額は2018年で7億5千万円を超えました

交付延べ人数

478人

2007年から若手枠への助成も始まり、
2018年までの交付延べ人数は478人に

一般枠



353人

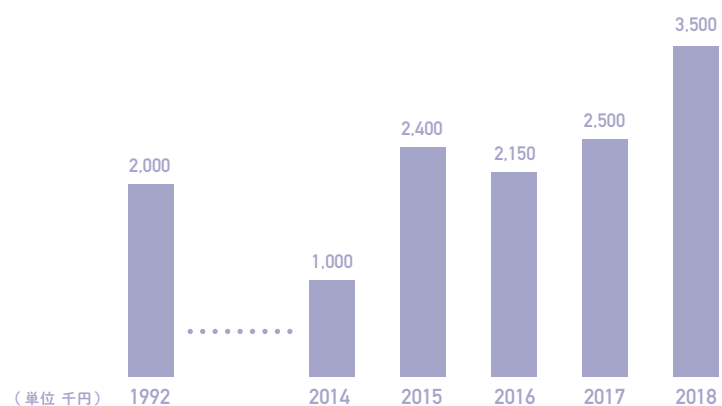
若手枠



125人



医学会助成



交付総額

4345 万円

1992 年から始まった医学会助成の交付総額は 2018 年で 4 千万円を超えました

交付延べ件数

75 件

2018 年までの交付延べ件数は
75 件となりました



小児医学川野賞

受賞者総数

1999 年に創設された川野賞。
受賞者は日本の小児医学界を
リードする方々ばかりです

39 人

回	氏名／所属機関
第 1 回	奥山 眞紀子／埼玉県立小児医療センター

回	氏名／所属機関	
	小児基礎医学	小児臨床・社会医学
第 2 回	林 泰秀／東京大学医学部小児科 長谷川 奉延／慶應義塾大学医学部小児科	平岡 政弘／福井医科大学小児科
第 3 回	廣瀬 伸一／福岡大学医学部小児科	大井 静雄／東京慈恵会医科大学脳神経外科学講座
第 4 回	緒方 勤／国立成育医療センター研究所	吉川 徳茂／和歌山県立医科大学小児科
第 5 回	斎藤 博久／国立成育医療センター研究所	加治 正行／静岡県立こども病院
第 6 回	伏木 信次／京都府立医科大学大学院医学研究科	
第 7 回	大橋 十也／東京慈恵会医科大学 DNA 医学研究所	夏目 長門／愛知学院大学歯学部口唇口蓋裂センター
第 8 回	峯岸 克行／東京医科歯科大学大学院免疫アレルギー学 塚原 宏一／福井大学医学部付属病院小児科	山高 篤行／順天堂大学医学部小児外科
第 9 回	金子 英雄／岐阜大学大学院医学系研究科医学部 地域医療医学センター	小崎 健次郎／慶應義塾大学医学部小児科学教室
第 10 回	深尾 敏幸／岐阜大学大学院医学系研究科小児病態学	高橋 幸利／国立病院機構静岡てんかん・神経医療センター
第 11 回	先崎 秀明／埼玉医科大学国際医療センター	海老澤 元宏／国立病院機構相模原病院臨床研究センター
第 12 回	下澤 伸行／岐阜大学生命科学総合研究支援センター	川崎 幸彦／福島県立医科大学小児科
第 13 回	福田 誠司／島根大学医学部小児科学	加藤 光広／山形大学医学部付属病院小児科
第 14 回	滝田 順子／東京大学大学院医学研究科生殖・発達・加齢医学小児科	浜野 晋一郎／埼玉県立小児医療センター
第 15 回	滝沢 琢己／群馬大学大学院医学系研究科小児科学分野	高橋 謙造／帝京大学大学院公衆衛生学研究科
第 16 回	田島 敏広／自治医科大学とちぎ子ども医療センター小児科	家入 里志／鹿児島大学学術研究院医歯学域医学系 小児外科学分野
第 17 回	北中 幸子／東京大学大学院医学系研究科小児医学講座	野津 寛大／神戸大学大学院医学研究科内科系講座 小児科学分野
第 18 回	竹田 誠／国立感染症研究所ウイルス第三部 深見 真紀／研究開発法人国立成育医療研究センター分子内分研究部	森岡 一朗／神戸大学大学院医学研究科内科系講座 小児科学分野こども急性疾患学部門
第 19 回	道上 敏美／地方独立行政法人大阪府立病院機構 大阪母子医療センター研究所環境影響部門	酒井 康成／九州大学大学院医学研究院 成長発達医学分野 (小児科学)

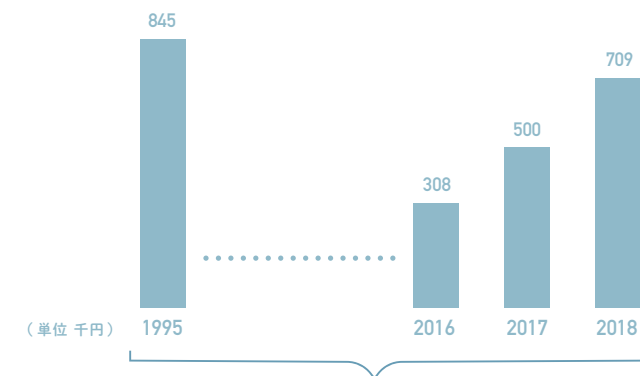
※敬称略・所属機関は受賞時の機関
※第 2 回以降は小児基礎医学及び小児臨床・社会医学それぞれの分野より選出

第3章

これからの財団



小児医療施設支援



交付総額

314万円

1995年から始まった小児医療施設支援の交付総額は2018年で3百万円を超えました

助成金の使途

DVD プレーヤー



テレビ



おもちゃ



本棚



etc.

以下の小児医療施設に助成金を交付しました

財団法人癌研究会附属病院小児病棟 / 国立小児病院血液腫瘍科勇気の会 / 国立がんセンター中央病院小児科 / 埼玉医科大学総合医療センター / 埼玉県立小児医療センター / 自治医科大学附属さいたま医療センター / 独立行政法人国立病院機構西埼玉中央病院 / 防衛医科大学校病院 / さいたま赤十字病院 / 南平野クリニック / 医療型障害児入所施設「カリヨンの杜」 / さいたま市立病院 など

これからの活動

小児医学・医療の進歩によって救われる命は確実に増えています。

一方で、長期的な治療が必要となる病気や障害などを持つ子どもたちは増えています。また、身体だけではなく、こころの問題に対する支援もますます重要になってきています。

そのような変化の中で財団の果たすべき役割も大きくなっていると考え、設立30周年という節目を迎えた2019年度に行政庁の変更、既存事業の拡大および新規事業の開始を決定しました。

1 行政庁の変更

2019年4月1日に内閣府より認定を受け、行政庁を埼玉県から内閣府に変更しました。小児医学・医療・保健の発展を支える財団として、これまで以上に多くの子どもたちの健やかな成長に役立つことができると考えています。

1989年

埼玉県の認可を得て、財団を設立



2019年

内閣府より認定を受け、
行政庁を変更・新規事業を開始

2 研究助成事業の応募資格 一部変更

これまでは「埼玉県内の高校を卒業しているか、首都圏内に在住している小児医学研究者」を対象としていましたが、2019年度からは「日本国内の機関で小児医学研究を行う研究者」であれば応募ができるよう、条件を拡大しました。

2018年度まで

埼玉県内の高校を卒業しているか、
首都圏内に在住し、日本国内の機関で
小児医学研究に従事していること



2019年度から

日本国内の機関で
小児医学研究に従事していること

3 小児医学川野賞の 募集分野拡大

これまでは「基礎医学分野」「臨床・社会医学分野」の2分野にて受賞者を選出していましたが、2019年度からは「基礎医学分野」「臨床医学分野」「社会医学分野」の3分野で受賞者を決定します。

2018年度まで

基礎医学分野

臨床・社会医学分野



2019年度から

基礎医学分野

臨床医学分野

社会医学分野

4 ドクターによる養護教諭のための 出前セミナー事業の開始

教育現場にて子どもたちに向き合い、成長の支援をしている養護教諭に対して事業を行います。養護教諭が生徒の抱える健康上の問題について学び考え、対応について知識を深めるために行っている研修会に、当財団が仲介役となり、小児科医を中心とした専門家を講師として派遣します。



事業内容

 研究助成	
対象分野	小児疾患の原因究明・診断・治療・予防等に関する基礎医学的研究、臨床および社会医学的研究 ただし、日本国内の研究機関で行う研究に限る
応募資格	申請者が次の要件をいずれも満たすものとする (1) 日本国内の総合大学医学部、医科大学、医学研究機関、医療機関等で小児医学研究に従事していること (2) 所属する組織の責任者から推薦を受けていること (3) 若手枠の場合は、40 歳以下であること
助成内容	〈一般枠〉100 ～ 300 万円以内／件 〈若手枠〉100 万円以内／件

 奨学金給付	
応募資格	次の要件をいずれも満たすものとする (1) 身体が健康であり、気質および素行ならびに学業が良好であること (2) 埼玉県内の高校を卒業し、日本国内の総合大学医学部、または医科大学で小児医学を志す大学生、および小児医学研究に従事している大学院生 (3) 学長、副学長、または学部長の推薦を受けていること
給付内容	〈給付金額〉月額 6 万円以内において理事会で定める額 〈給付期間〉正規の最短修業年限以内

 小児医学川野賞	
対象分野	小児医学、ことに基礎医学・臨床医学・社会医学に関する研究
応募資格	次の要件をいずれも満たすものとする (1) 55 歳以下であること (2) 所属する学会もしくは組織の責任者から推薦を受けていること
顕彰	賞状、メダルおよび賞金 100 万円

 医学会助成	
応募資格	日本国内で開催する小児医学に関連する医学会
助成内容	50 万円以内／件

 小児医療施設支援	
応募資格	原則として埼玉県にある医療施設
助成内容	15 万円以内／件

 NEW ドクターによる養護教諭のための出前セミナー	
応募資格および申込方法等の詳細は当財団 WEB をご確認ください！	

財団情報

〔財団名〕	公益財団法人川野小児医学奨学財団 Kawano Masanori Memorial Public Interest Incorporated Foundation for Promotion of Pediatrics
〔所在地〕	〒350-1124 埼玉県川越市新宿町 1-10-1
〔設立〕	1989 年 12 月 25 日
〔行政庁〕	内閣府

役員・評議員・選考委員一覧

〔理事〕	〔選考委員〕
理事長 川野 幸夫 株式会社ヤオコー / 代表取締役会長	雨宮 伸 埼玉県社会福祉事業団嵐山郷 / センター長
常務理事 柳澤 正義 国立成育医療研究センター / 名誉総長	奥山 眞紀子 社会福祉法人子どもの虐待防止センター / 理事
川野 光世 株式会社川野商事 / 代表取締役	● 柊島 香代 文京学院大学人間学部児童発達学科 / 教授
吉野 芳夫 伊藤忠商事株式会社 / 理事	河野 陽一 城東桐和会 タムス浦安病院 / 院長
新井 一 順天堂大学 / 学長	坂本 穆彦 大森赤十字病院 / 顧問
上池 昌伸 株式会社ヤオコー / 常務取締役	城 宏輔 医療法人すずき小児科 / 院長
〔監事〕	貫井 英明 山梨大学 / 名誉教授・名誉顧問
杉田 圭三 株式会社 CWM 総合経営研究所 / 取締役会長	野々山 恵章 防衛医科大学校小児科学講座 / 教授
原 敏成 武州瓦斯株式会社 / 代表取締役社長	林 泰秀 上武大学 / 副学長
〔評議員〕	桃井 眞里子 自治医科大学 / 名誉教授
川野 清巳 株式会社ヤオコー / 相談役	山縣 然太朗 山梨大学大学院総合研究部医学域社会医学講座 / 教授
川野 澄人 株式会社ヤオコー / 代表取締役社長	● 山崎 章子 埼玉県立浦和高等学校 / 養護教諭 埼玉県養護教諭会 / 会長
利根 忠博 一般社団法人埼玉県法人会連合会 / 会長 埼玉りそな銀行 / 元会長・社長	山城 雄一郎 順天堂大学大学院プロバイオティクス研究講座 / 特任教授
村井 満 公益社団法人日本プロサッカーリーグ / チェアマン	※ 敬称略・五十音順 ※ ● はドクターによる養護教諭のための出前セミナー事業の選考委員
高篠 包 高篠・柿沼法律事務所 / 弁護士	
豊田 友康 株式会社メディバルホールディングス / 監査役	

※ 敬称略・順不同

2019 年 6 月 14 日現在

おわりに

一つの財団としてできることは決して大きなものではありません

しかし

この社会にある多くの財団や団体一つひとつの活動の重なりが
小児医学の発展、そして子どもたちの明るい未来につながっていくと
信じています

だからこそ

これまでの歩みを途絶えさせることなく

これからもこの財団の役目をしっかりと果たしていきたい

かけがえのない子どもたちの笑顔を思い浮かべながら

心からそう思っています

公益財団法人川野小児医学奨学財団
理事長

川野 幸夫



編集後記

30年間の活動内容に加え、その背景にあった考えや想いを皆
さまにできる限り分かりやすくお伝えできるよう、この記念
誌作りに取り組んできました。

古い写真や資料を整理する中で、当財団がどれほど多くの
方たちに支えられてきたかを感じると同時に、多くの方たち
をご支援させていただいたことを改めて実感しています。日々
の仕事の中では、なかなか感じることでできない貴重な機会と
なりました。これからも財団の理念を忘れることなく、一歩一
歩進んでいきたいと思っています。

本誌の制作にあたり、ご協力いただきました皆さまに心よ
り御礼申し上げます。

事務局長 川野紘子

川野正登記念公益財団法人

川野小児医学奨学財団

設立30周年記念誌

編集

公益財団法人川野小児医学奨学財団 事務局

デザイン

株式会社セイタロウデザイン

文章

宮本さおり

写真

公益財団法人川野小児医学奨学財団 事務局
荒井写真事務所

校正

株式会社 鷗来堂

印刷・製本

株式会社 太平洋社印刷所

発行

公益財団法人川野小児医学奨学財団